

校訂『青龍山十祖伝』(一)

日 比 野 晃

はじめに

『青龍山十祖伝』は、愛知県犬山市にある瑞泉寺の開山から十世までの伝記で、瑞泉寺の塔頭龍濟庵の施主肥田信易によって、一八三四年(天保五)に著わされた。けれどこの原本の所在は現在不明で、本稿作成にあたって用いた底本は、一九一三年(大正二)に名古屋市史資料の一つとして奥村定が写本したもの(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)である。

肥田信易はこの書の序(通俗瑞泉寺物語)の中で「龍山の書記寮に在りて種々のかきものに拝謁し、開山御法のありがたきを知りて、始祖開山より四派祖の歴代迄其の伝をかきつゝまんだとしている。しかし本書の内容・表現をみると、雪江宗深の『正法山妙心禅寺記』および東陽英朝の『正法山六祖伝』を訓読筆写しているのが大半で、それに仁溪慧寛の『青龍山瑞泉禅寺記』(本書も前二書を大中に引用している)に依拠していることがわかる。したがって校訂するにあたって、『正法山妙心禅寺記』・『正法山六祖伝』(寛永一七

年版本Ⅱ花園大学図書館蔵)及び『青龍山瑞泉禅寺記』(万瑞弁愚校正本Ⅱ龍濟寺蔵)を校合本とした。

読解の便をはかり、次の原則にもとづいて校訂した。

- 一、底本には段落がないが、文脈に応じて適宜に改行した。
- 一、漢字は原則として新字体を用い、古字・俗字・略字などは通行の字体に改めた。
- 一、変体仮名は通行の平仮名に改め、平仮名には必要に応じて濁点を施した。
- 一、句読点・並列点を付し、現代仮名遣いにしたがって送り仮名を付した。
- 一、特に読み難い語にはその右横に()をつけて振り仮名を付した。また、語意を理解しやすくするために、その語の右横に()をつけて漢字を付した。
- 一、明らかな誤字・脱字は断りなく訂した。

なお、本文の語句の注および校異は、語句の右に()をつけて番号を付して、末尾にまとめて記した。

目次

通俗瑞泉寺物語	一
始祖開山無因大和尚伝	五
創建開山日峰大和尚伝	八
黄梅義天大和尚伝	一五ウ
龍濟雲谷大和尚伝	一八ウ
慈明桃隠大和尚伝	二〇ウ
妙喜雪江大和尚伝	二三
大亀景川大和尚伝	二七
臥龍悟溪大和尚伝	三〇
輝東特芳大和尚伝	三五
臨溪東陽大和尚伝	三六

通俗瑞泉寺物語 巻の上^山

むかし聞く。釈迦牟尼仏の真実の仏法は迦葉尊者の微笑に伝えてこれを宗旨の本源とす。⁽²⁾ 廿八世の後、達磨大師あり宗門の初祖とす。⁽³⁾ 大師、天竺よりから国に其の禪をうつし、又廿八世の後、大応国師⁽⁴⁾其の禪を本朝に伝へ給ふ。天竺にて四七、から国にて四七、⁽⁵⁾日本廿四流の禪の最上と云うべし。

大応、大灯、関山、授翁、無因、日峰と続き給ふ。⁽⁶⁾ 当山は則ち四七、四七の嫡伝なり。田舎本寺と称する事は、日峰大和尚此の山を開き、大伽藍を草創して二十四流の僧侶を此の山に傾け、乾峰の法窟と呼んで当山に登らざる僧は禪門の僧といわれずとかや。

しかるに永亨のはじめ、華園妙心寺、大いに衰えて、善美尽したる離官の結構も雨にぬれ風に破れて、巍然たるものは微笑の一塔のみ。⁽⁷⁾ 微笑塔とは開山関山国師のまします妙心寺開山塔なり。これを玉鳳院といふ。⁽⁷⁾ 殊に住僧は他流の禪僧なり。哀れなる有さま、いふも更なり。その僧云う。寺といふは興廃住持の気力によるものなり。われ他流にして住すること本意なし。今爾にかへすべし。誰にても法孫の有る力量を請し、中興し給へと。南禅の宗利西堂⁽⁸⁾に妙心寺を返し給ふ。因りて衆議一決して当山の日峰大和尚を請し奉る。和尚固辞し給へど、衆議の一決、殊には五山の敦請ありて辞するに忍びず、終に華園に移転して草を薙き瓦礫を拾ひて妙心寺を中興し給ふ。今、日本にて昌なる華美つくしたる本山妙心寺と申すは日峰和尚の力量なり。都ての式法は瑞泉の格にならいて立て給ふ。日峰、義天、雪江と継ぎて、雪江下に景・悟・特・東⁽⁹⁾の四派となる。妙心派下に四派ならざるはなし。皆是瑞泉一滴の水より出て千流万派、日峰和尚の法孫なり。且つ云う、雲谷・桃隠の二和尚に法嗣の僧なし。一世にして絶すといへり。開山日峰大和尚華園へ移転の後には当山の看住、義天・雲谷・桃隠の三和尚、交々勤めて常に半千の衆を当山に教示し給ふ。又、雪江という貴き人あり、雲谷・桃隠、法叔と成りてこれを育て、終に日峰の禪をこゝに授け納む。雪江、数く二僧に耻かしめらるゝといへども、面上に耻じ

るいろなしと云う。則ち二僧の法は雪江の大河に入りて、終に四派の父と成りけり。今、天下に顕たる事しるしといへり。たとへ高僧高官の和尚たるとも、宗旨の伝にこゝろがけざる人はかくの由緒を知らず。況んやわれら凡俗の身にして何ぞ知る事を得ん。幸ひなるかな、近ごろ龍山の書記察に在りて種々のかきものに拝謁し、開山御法のありがたきを知りて、始祖開山より四派祖の歴代迄其の伝をかきつまみ、当山の由来を尋ねる人のたよりとす。

天保五年きのえ午春

檀越 浄麟謹書

〔頭書〕

日本廿四流禪如左

- 一 京建仁寺明菴榮西禪師、備後の人
- 二 越前永平寺道元禪師、京の人
- 三 京東福寺弁円々爾禪師、和入
- 四 紀州興国寺心地覚心国師、日本人
- 五 相州建長寺蘭溪道隆禪師、宋人
- 六 建長寺兀庵普寧禪師、宋人
- 七 相州浄智寺大休正念禪師、宋人
- 八 浄智寺無像静照禪師、日本人
- 九 相州円覚寺子元祖元国師、宋人
- 十 京南禅寺一山一寧禪師、宋人
- 十一 建長寺南浦紹明国師、和入
- 十二 建長寺西礪子曇禪師、宋人

- 十三 建長寺鏡堂覚円禪師、宋人
- 十四 建長寺靈山道隱禪師、宋人
- 十五 建長寺東明恵日禪師、宋人
- 十六 南禅寺清拙正澄禪師、元人
- 十七 南禅寺明極楚俊禪師、元人
- 十八 丹州天寧寺愚中周及禪師、濃州岐阜人
- 十九 南禅寺竺仙梵僊禪師、元人
- 廿 建仁寺別伝妙胤禪師、元人
- 廿一 建長寺古先印元禪師、薩州人
- 廿二 建長寺大拙祖能禪師、鎌倉人
- 廿三 建長寺中巖円月禪師、鎌倉人
- 廿四 南禅寺東陵永瑛禪師、元人

右に黄檗隠元国師、合わせて二十五流。

由。大師、姓は達、字は曇磨、諱は磨。南天竺の内モウルの人なる

派あり。宋利は南禅寺の西堂にして雲山峨和尚の法嗣なり。南禅に関山

或る寺の住僧へ官府より雲谷和尚の事尋ねさせ給へば、答えて云う、北みのの内にて開山所有り、字は桃隠、諱は雲谷と書き上げ給ふよし。

始祖開山無因和尚伝

師、諱は宗因、字は無因。法を妙心授翁和尚に嗣ぐ。妙心寺三世の住持なり。尾州の産にて、俗姓は平氏荒尾の一族。歳、九つにして其の父伴つて都にのぼり、東山建仁寺に至り、天潤庵の然可翁に侍奉なましむ。薙髮し、十五歳にして沙弥と成り、十七歳にして得度す。可翁、釣帖を奉じて東山に視篆す。挙げて請客侍者とす。師少し時、杜詩を嗜む。壮年にして周易に精す。

一日翁法語を示して云う。雪峰和尚僧に示して曰わく、僧堂前に你と相見し了れり。石嶺に你と相見し了れり。望州亭に你と相見し了れり。這の公案、因侍者如何が領略するや。若しこ、において一隻眼を著け得れば、他日必ず法幢を建て、宗旨を立し去らん。勉めよこれを。師、三十九歳にして東山の維那となる。山中、相称して因維那といふ。天資高潔にして且つ世事を疎んず。其れ清貧、骨に徹するをいかん。

これよりさき、三十五歳の時、飄然として撥草参玄のこゝろざしあり。妙心の授翁和尚、宗風大いに振いて学者駿奔す。師、聞き得て渴驥の泉に趣くが如し。東山より法山に來住し、衆に隨いて参禪す。久しくして愈勵し、天潤の諸老、師の志を察して將た靡ぐに清要の職を以て位を後版に転じめん事を擬す。師、これをさととして俄かに起單す。

錫を華園に移して專一に参究す。果して大休歇の地に到り、微笑

塔下の的孫と作り得たり。蓋し妙心の風度、開山より以來唯此の事を専らにして行事・礼楽に拘わらず、師の來るに速んでやや大方の叢林に准じて飄経の体裁あり。をもへらく、仏法久住の相なりと。

授翁和尚いふ。何ぞ必ずしも因維那善くなさば則ち可なりと。

雲州の大守藤重通、波多野氏、通代曹洞宗に帰依し、越前永平寺の外護たり。この頃、洛に在りて密かに師の室を叩きてすこぶる省処あり、遂に誠を臨済向上の宗風に傾く。仍つて城中に一字を翫めて、師を請じて住せしむ。扁して退蔵院といふ。且つ莊園を寄附して永く以て且縁を結ぶ。今、正法山中に退蔵院あることは、後來、城院を正法山に移すなり。

師八十五歳の時、勝定院贈大相国義持公、師の道徳を開いて、迎へ請じて相見せんと擬欲す。師、老病衰情を以てこれを甘んぜず。俄に肩輿に命じて津州海清寺に歸老し給ふ。

爰に大徳の専使、請状を齎して至る。師、固辞して起つ事をがへんせず、尋ねて不安なり。未だ滌篆せずして示寂す。時に応永十七年庚寅六月四日なり。塔を光沢庵と名づく。法嗣は関西和尚・徳翁和尚・日峰和尚・春夫和尚、此の四人なり。

〔頭書〕

元禄戊寅秋、聖上賜諡興文円慧禪師。師、妙心寺に住する事は年数も見へず。雲山和尚・拙堂和尚、妙心に住し給ふ。師は西宮海清寺に住して、河内の観音寺、京都円福寺等へ移転し、又、海清寺に歸老し給ふ。

瑞泉寺建立、応永廿一年乙未なり。円寂の後なり。日峰和尚、師を勧請して開山始祖に崇め給ふ。師は尾州の人ゆへに、死して故郷に帰る事あれば、こゝに御心をよせ給ひし建立なりと聞き侍る。

海清寺に帰老の時、山居の偈あり。今、瑞泉の重宝にて、むかし妙心より寄附といふ。此の偈二首なり。一首は妙心寺にあり。

居処幽邃遠朝市 不聽人間非与是

煙列淡墨山横屏 不知身有画図裏

右為舜上人書

無因和尚の墨跡は他にあらず。当山・法山の二軸なり。

写真自賛曰

遍空遍界 影跡全新 何将五彩 強画斯身

山雲片片 水石磷磷 縦経塵劫 寧喪天真

創建開山日峰大和尚伝

師、諱は宗舜、字は日峰。法を無因和尚に嗣ぐ。京西の嵯峨の人なり。俗姓は藤原。其の先、嵯峨を食邑とす。因つて家居し、後來、河島氏とす。母は源氏の裔にして賢行あり。曾て法輪寺の虚空蔵菩薩に詣でて、奇男子を祈求す。百日を以て期とす。期満たる夜、母夢に一老僧、虚空蔵の龕中より出て、手に菊一枝の花を持ち以てこれを授く。こゝによつて懐妊す。誕るに及んで穎異なり。小字を菊夜叉といふ。叔父、教えるに論語・孟子を以てす。授ける事一編

にして誦む。

九歳にして父携えてむらの本源庵に投じて、岳雲の室に登らせて弟子とす。始め薙髮して、諱を昌昕といふ。本源庵は臨川寺の西に有る大井河の畔なり。父の私宅、庵と隣る。むかしは天龍国師、建仁の請を辞せし時、禅居の大鑑禅師自ら疏を製して、大衆をして齋し持ち去らしむ。列参拝請す。東山の衆、已に臨川の門に造る。国師これを聞いて、垣を踰えて一家に逃げ匿ると云う。すなはち師の父の私宅なり。岳雲は天龍の高弟なり。はじめ臨川に住し、後、雲居にうつる。しかるに師の薙髮は雲居に在りし日なり。十五歳にして沙弥となる。十九歳にして得度す。早年より遊方参詳の志を抱く。いまだ善知識に遇わず。或は岩栖谷飲して迹定止なし。曾て勢州日長の光讚寺に夏を度る。清旦に旭光の聖像、龕を射るを觀て忽然として本来の面目を省得す。見解を呈せんと欲するに師なし。夏、了つて起単す。

此の時、奥山の無文禅師の道徳、東関に重く、衆、半千に過ぐる。師、聞き得て直ちに遠江の国に至り、其の席下に侍す。一日文問う、听上座何人に参見し來たる。師答えて曰わく、多年時に草鞋を踏み破り、全く一智半解の分なし。近ごろ一寺に在りて恰も箇の本来面目に撞着するに似たり。未だ知らず。是なりや否。因つて所見を呈す。文、掌を拊ちて曰わく、老僧は先師の処に在りて這の境界を悟得して、以て此の山に住すること数十年。今、吾が徒衆五百員、你が見地の如きものいまだ一人も見ず。しかもかくのごときといへども、趙州甚に因つてか箇の無の字を道う這の語、你如何領會するや。

師、これを聞いて弥驚愕す。遂に文の会裡に在りて、無の字を参得し了れり。文は則ち無準の嗣、雪岩の下の尊宿なり。

又、無文を辞して濃州に行き遠山の大円寺の薰南山に見ゆ。山はもとこれ三頓棒下において大徹する底の作家老宿なり。然もみづから韜晦して薰庵主と号す。時の人これを知らず。以謂、道者の家風あるのみ。師いたる。殊に推重せられて、一日従容として謂いていわく、听や侏は法器なり。わが会裏に在ってまた甚だ惜しむべき許り。われ耄にして且つ愚なり。侏を成穢すること能わず。まさに今、天下に大眼目を具する底の宗師は唯無因和尚一人あり。見るに津陽の海清寺に住す。何ぞ速やかに参取し去らざる。師、慈誨を聞いて辞するに忍びず。山、再三勸諭す。仍つて無因に寄する書を作りて師に付して曰わく、これを持ちて紹介となし、され（志）。師、是に於いて応諾す。山、忻然として曰わく、我が言既に聴許せられ、実に望む所なり。輒ち衲衣・草鞋錢を与えて以て行を送る。師、書を受け、二品はかへして去る。山、別れに臨んで更に叮囑して曰わく、上人彼に到りて大悟・大徹するにあらざるよりは、敢えて門を出づべからず。願わくば此の誓をなせ。師、言下におゐて発誓して、泣いて拝辞す。

既に津州に行きて巨鼈山に登り、無因和尚に参礼す。因つて問う、近離甚什処の。曰わく、奥山より来たる。無文の示す所如何。曰わく、只だ箇の無の字を消す。曰わく、好し響。是参禅の根源なり。便ち徳山托鉢の話を示す。向者の南山紹介の書はつるに托呈するに及ばずして参堂し了れり。述来、許多の贅訛、百練千鍛す。日夜勉励し

て、志少しも屈する事なし。和尚、河内の観音寺に遷住し給ふ。師もまた参侍すること五年。片野の大悟庵たま／＼主席を虚にす。和尚、師を以てこれに住せしむ。庵と観音寺は三里を隔たり、師、毎日往復請益して余疑を究決す。曾て倦色なし。和尚、又京の円福寺にうつる。師も又随いて京に上る。一夕夢に、仏殿前の柏樹上に蒼龍の明珠を弄するを見て效得して懷中に納めると、其の翌、参学の事了畢せり。印可を蒙り、仍て諱を宗舜、字を日峰と称す。無因和尚、平居毎に舜はわれに勝れるの僧なりと称し給ふ。和尚滅後、濃州可児郡春木の無着庵に屏いて、又尾州繼鹿尾山に登りて教寺の閑房を借りて大藏経を看給ふ。

師、繼鹿尾山に登り給ふ其の曉に本尊の観世音菩薩、院主の枕上に立ち給ひて告げて曰わく、今日当山へ客僧有り、院内を莊嚴して待つべしと。院主、夢覚めて是は不思議なる夢なりと又まどろみけるに、大士又告げて曰わく、客僧はかくの如くの尊容なりと。院主、驚いて掃除し、今や来たり給ふと待つ計りなり。其の日、未の刻ばかりに、疲れたる杖を引き衲衣をかけて老僧坂に登り給ふ。見るに大士の見せ給ふ尊容に違はず。走り出て迎ひ奉り、手を取りて坂を上る。師云う、われは左様の御あしらいあるものにあらずと侍り給へば、院主、夢中の告げをかたりける。こゝに閑所をかりて、大藏経を看給ふこと四、五年なるか。

犬山内田左衛門次郎といふもの信者にて、月々神社・仏閣に順拝す。伊勢参宮の折から朝熊山虚空藏菩薩に拜礼す。一僧、経を看給ふ。次郎、こゝに立ちより、先達でも参詣の折に拜謁し、また今日

も御看経有りしと言葉懸けたれば、師云う、汝は何国の人なるや。答えて云う、われは尾州犬山のものにて候と。師尋ねて云う、つがの尾山は里程いか計り候や。答えて申す、かの山は私山の並びにて峰をつらね候よし申しければ、方疆迄も御問ありて別れ、立ち帰りける。此の左衛門次郎を里俗呼んで仏サイムサと云う。

時に、師つがの尾山に來たり給ふこと聞いて次郎急ぎ登山し、師に拜謁し奉りて朝熊山の事など物がたりし、わが私山を奉り候はん。願わくは道場を開き給ふ事をねがふ。師、応諾して次郎を案内者にして、峰々谷々迄も順見し給ふ。また、沙弥玄瑞といふ者をして見せ給ふに、佳地には候得ども水なしと云う。仍って師來たりて錫を以て卓云、こゝに水あるべしとの給ふ。時に青龍天に飛揚し、清泉涌き出る。今の青龍池これなり。師悦びて、終に一道場をひらき、龍の登るを以て青龍山と号し、玄瑞侍する。依りて瑞泉寺と称す。

草を薙ぎ茅を結びて一榻を下し、端座して仏を叱り祖を罵り、大法を説き給ふ。こゝ、かしこより僧となく俗となく群れ集りて随喜し奉り、程なく結構の大伽藍とぞ成りにける。比は応永廿二年乙未なり。天下の禪僧廿四流の徒、相登りて乾峰の法窟と称し、当山に登らざる者は禪門宗旨の侶と云わずとかや。こゝにおゐて既に臨濟正脈を以て玄承藏主に付属し給ふ。これを当山転位のはじめとす。諱は玄承、字は義天、第一座の請をうけ、次に玄祥藏主、字は雲谷、玄朔藏主、字は桃隠、印可をうけて第一座の請を受け給ふ。

然るに永享のはじめ、華園妙心寺大いに衰へたり。他門に領せられて僧衆を安んぜず、殿堂を毀取す。園林黄落して、鳥平蕪に下り

る。唯、微笑の一塔のみ巍然たり。授翁⁰¹下に雲山義和尚・無因因和尚・拙堂朴和尚等、継ぎて妙心に住す。応永の始め拙堂住す。同六年己卯、防州の多々良義弘謀叛す。泉南の堺に割拠して官軍と拒み戦ふ。拙堂和尚、義弘に會て師檀の好み有り。鹿苑院大相国義満公⁰³窃に聞けり。少頃で官軍大いに克つ。義弘自刎す。泉南既に平らぐ。官軍凱旋の日、諸將相府に訴えて曰わく、妙心の拙堂、賊虜に混じて軍中に馳突す。賊と同罪なり。相公、領かふ。寺に咎なしといへども、住持の人を罪せん為、いかりを華園にうつして封疆を笈取し、

諸庄・寺産を籍没して併せ以て青蓮教院に昇ふ。三年の後、また悉く収録して割りて七所を龍雲の廷用和尚に分付す。自余の莊園も亦諸方に散与し了れり。永享のはじめに至りて此の山尚お他門に領せられたり。

一日廷用和尚⁰⁴、南禪の宗利西堂を召して云う。此の妙心寺は汝が祖師の遺迹なり。年来、釣命を以てわれに賜ふ。われ今當にかへすべし。西堂よろしく同門の耆老に報じて、合浦の珠を收拾せば可なり。利公、珍重して退く。こゝにおゐて門中の老宿の洛涯に散処するもの会議という。興廢は宗師の力量⁰⁶によるべし。宣光の才、まことに難いかな。方今、日峰和尚化を青龍山に旺んにす。人天の帰敬する攸なり。中興の主盟、此の老に非ずして誰ぞや。みないふ、専使を遣わして禪師を尾の瑞泉に起たしめて妙心寺に住持せしむべし。庶幾⁰⁷は聖徳の所感にして伽藍頓に現して睹史・夜摩の天より降りるが如くならんことを。しかれども師、固辞すること再三。門中、尚お敦請してやまず。師、竟に命を領して已に入寺す。

野外に綿叢して旧礼樂を講ず。先ず函丈を造りて学者を鉗錘す。

次に微笑塔を莊嚴して以て人天の瞻礼に備ふ。稍く退蔵院を営みて、又みづから小院を山堂の傍らに創して養源と号し、塔基に就いて帰蔵の地となす。数年の間に叢規粗備わる。師、少より身を律にして三学該鍊す。老いて益森嚴なり。人を接して倦むことなし。丈室に端座して日夜応酬し、龍蛇を弁し虎兇を擒ふ。且つ棒喝の余力に、或いは経録を講談す。四衆欽仰すること仏の出世のごとし。苟しくも且越の樂施あれば多少によらず常住に歸して修造に充つ。仍りて正法山に中興開山の牌を安置す。

師、歳八旬にして勅を奉じて大徳寺に入寺す。山門を指して曰わく、虚堂は八十にて再び住山し、老僧は八十にて初めて入寺す。閑回避するに処なし。喝、一喝。明年、妙心寺におゐて示寂す。全身を奉じて養源塔に収む。文安五年戊辰正月廿六日なり。塔院の昭堂に虚空蔵の金像を安置し、菊光堂を以て額とす。小字の機縁を取れり。二十五年忌に禅源大濟禪師と勅諡す。法を嗣ぐ者三人、黄梅の義天、龍濟の雲谷、慈明の桃隱なり。当山にては塔を本源院と額す。これは師の剃髪し給ふ本源庵をうしなはざるためなりと云々。

注

- (1) 「巻の上」とされているが、この後に「巻の下」としての項目は底本に出てこない。
- (2) 現在では偽経と云われる「大梵天王問仏決疑經」に次のようなことが記載されている。
 へ 釈迦が靈鷲山で大衆に説法した時に、金蓮華をひねったけれど誰もその意味がわからなかった。しかし摩訶迦葉のみがその意を悟って破顔微笑した。そこで釈迦は「我に正法眼蔵涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付属す」と云って正法を伝授した。
- (3) 中国での禅宗、六祖（曹溪慧能）以来、禅が以心伝心・教外別伝を重んじたがために、右の迦葉の付法相承説が重視され、これが禅宗の起源であると云われる。
 拈華微笑・拈華瞬目・破顔微笑・世尊拈華・迦葉微笑なども云う。
 達磨は禅の伝灯において、インドでは第二十八祖にあたるが、インドより中国へ伝えたので中国では初祖と云うことか。
- (4) 南浦紹明（一一三三―一一三〇八）。中国で楊岐派の松源派である虚堂智愚に印可を受けて帰国した。
- (5) 「四七」と言う表現は掛け算の九九で、言外に二十八を言おうとしているのであろう。即ち、インドにおいて、釈迦から法を受け継いだ迦葉を第一祖として達磨まで二十八代（二十八祖説）。そして達磨から南浦紹明までが二十八代と云うことだろう。
- (6) 南浦紹明、宗峰妙超、関山慧玄、授翁宗弼、無因宗因、日峰宗舜の師資相承の伝灯系譜で、臨濟宗大応派。現今の臨濟宗諸派は法系上すべて

- この系統に属している。
- (7) 玉鳳院は花園天皇が讓位後に住んだ所で、開山塔ではない。
- (8) 根外宗利（生没年不明）。雲山宗峨より印可を受けた。西堂とは禪宗寺院で最高の賓客を遇する場所であり、そこに居住させる他寺の前任職の呼称。
- (9) 景川・悟溪・特芳・東陽の四派。
- (10) 肥田信易（？～一八四〇）。信易は犬山の町民であったが、『犬山里語記』などを著わし、生前に「麒麟浄麟居士」の戒名をつけてもらっており、それを使用している。（拙稿「犬山里語記」について―肥田信易とその周辺―）『中日本自動車短期大学論叢第五号所収』
- (11) 「」でくくられた「頭書」と云う表現は、『青龍山十祖伝』を写本した奥村定が書いたものと考えられるが、これは「頭注」とすべきで、本文の語句の注として加筆されていたものを、こゝにまとめて書いたのであろう。
- (12) 雲谷玄祥と桃隠玄朔を「或る寺の住僧」が混同していたことがある例を挙げている。正しくは「字は雲谷、諱は玄祥」と書き上げるべきであった。
- (13) 可翁宗然（？～一三四五）。臨済宗大応派。筑前出身。南浦紹明に印可を受けたのち入元し、中国の天目山の諸師に歴謁した。帰国後、筑前の崇福寺、京都の万寿寺・建仁寺・南禅寺などに歴住し、晩年は建仁寺中の天潤庵に退居した。普済大聖禪師。
- (14) 雪峰望州烏石の公案。「雪峰示レ衆云、望州亭与レ汝相見了也、烏石嶺与レ汝相見了也、僧堂前、与レ汝相見了也、保福問「鷺湖」、僧堂前且置、望州亭、烏石嶺、相見事如何、鷺湖聚歩歸「方丈」、保福低頭入「僧堂」。
- (15) 波多野重通（生没年不明）。藤原秀郷の後裔。祖父の義重が地頭職を
- もつ越前国志比莊に道元を招き、大仏寺（のち永平寺と改称）の建立に貢献した。
- (16) 足利義持（一三八五～一四二八）。室町幕府四代將軍。法号は勝定院顯山道詮。
- (17) 宗因の法嗣は、嘉永重撰『正法山宗派図』によると、春夫宗宿（生没年不明）・徳翁（生没年不明）・謙翁宗為（？～一四一四）・関西（生没年不明）・日峰宗舜（一三六七～一四四八）の五人。
- (18) 雲山宗峨（妙心寺四世）・拙堂宗朴（妙心寺六世）。
- (19) 夢窓疏石（一二七五～一三五二）。円覚寺十五世・南禅寺九世・天龍寺・相国寺開山。国師号は夢窓・正覚・心宗・普済・玄猷・仏統・大円の七つを勅諡されているが、天龍寺の開山であるところから天龍寺の開山であるところから天龍國師と云っているのであろう。
- (20) 清拙正澄（一二七四～一三三九）。建仁寺二十三世・建長寺二十二世・円覚寺十六世・南禅寺十四世。
- (21) 『正法山六祖伝』では「聖僧」。
- (22) 無文元選（一三三三～一三九〇）。可翁宗然などに参学したのち、入元して古梅正反に印可を受けた。帰国後、遠江の是栄居士が同國奥山に方広寺を建立して請じたのを受けて開山となる。
- (23) 趙州一揅の公案。「趙州、尼問、如何是密密意、州以レ手拈レ之、尼曰、和尚猶有「這箇」在、州曰、却是你有「這箇」在」
- (24) 『正法山六祖伝』では「話」。
- (25) 無準師範（一一七八～一二四九）。
- (26) 雪巖祖欽（？～一二八七）。
- (27) 南山宗董（生没年不明）。
- (28) 近離甚（什麼）処。「きんりいずれのところぞ」「ちかごろなんのと

ころをかはなるる」。何処よりここへ来たか、と云う言葉で、禅僧の修行の境地を験すために使われる。

(30) 徳山托鉢の公案。「徳山一日托鉢下レ堂、見レ雪峰一問、者老漢、鐘未レ鳴鼓未レ響、托鉢向レ甚処一去、山便回レ方丈、峰拳ニ似巖頭一、頭云、大小徳山未レ会ニ末後句一、山間令下侍者喚ニ巖頭一上来、問曰、汝不レ肯ニ老僧一那、巖頭密啓ニ其意一、山乃休去、明日陞座、果与ニ尋常ニ不レ同、巖頭至ニ僧堂前一、拊レ掌大笑云、且喜、得ニ老漢会ニ末後句一、他後天下人、不ニ奈伊何一」

(31) 授翁宗弼（一二九六―一三八〇）。妙心寺二世。

(32) 大内義弘（一二三六―一三九九）。室町時代初期の武将。十六才の時以来、九州・中国を経略し、父弘世の跡も継ぎ明徳の乱でも功を挙げて周防・長門・豊前・石見・和泉・紀伊の守護を兼任する大勢力となった。しかし応永の乱を起して敗死した。

(33) 足利義満（一二三八―一四〇八）。室町幕府三代将軍。室町幕府の最盛期をつくった。法号は鹿苑院天山道義。

(34) 延用宗器（生没年不明）。魯山良周に印可を受け、天龍寺四十三世となったのち南禅寺八十六世となる。勅諡、徳光普照禅師。

(35) 合浦珠遷ガッポナマカエ。合浦（中国の広東省にある地名）は美しい珠を産出していたが、貧欲な役人が多くて産出しなくなった。しかし後漢の孟嘗が太守になり清潔な政治をしたので、再び珠を産出したという故事。

(36) 『正法山妙心禅寺記』では「道力」。

(37) 『今昔物語集』巻第一第廿二に、「其ノ時ニ仏宣ハク、「此人、一日ノ出家ノ功德ニ依テ四天王ニ生レテ毗沙門ノ子ト成テ諸ノ天女ト五欲ノ楽ヲ受ク。其ノ天ノ命五百歳満テ後、切利天ニ生レテ、天帝釈ノ子ト成テ、其ノ命千歳、其ヨリ夜摩天ニ生レテ其王ノ子ト成テ其ノ命二千歳、

其ヨリ睹史多天ニ生レテ其ノ王ノ子ト成テ其ノ命四千歳、（中略）広ク人天ヲ度スベシ」ト説給ケリ」とある。

(38) 虚堂智愚（一一八五―一二六九）。臨済宗楊岐派松源派。中国（南宋）の四明象山出身。金山の運庵普巖の法嗣で、南浦紹明に法を伝えた。興聖寺に住して以来、報恩・顕孝・瑞巖・延福・宝林・育王・浄慈・径山の諸寺に歴住した。